

南 香(なんこう)

登録番号：第1857号

育成者：奥代直己 石内傳治 生山 巖

登録年月日：平成元年3月27日

高原利雄 松本亮司 村田広野

登録者：農林水産省果樹試験場

浅田謙介

(茨城県つくば市藤本2-1)

来歴：「三保早生」と「クレメンティン」の交雑実生

特 性

■栽培特性

樹勢は中程度、幼木時代は直立性であるが、結果を始めると開張する。枝葉は密生する。春枝は硬くて、短いげを生じる枝が多いが、樹齡を重ねるにしたがって無くなる。葉の大きさはウンシュウミカンより小さく、披針形で、葉色はやや薄い。

結果期に入るのが早く、結果性は良好で、連年結果する。蒴は退化し花粉は全く形成しない。単為結果性を有し、無核性であるが、果形および大きさが不揃いとなりやすいので、十分な摘果が必要である。また上向きの果梗部の大きい果実は大果となり、す上がりしやすく、品質も劣るので摘果し、有葉果で下向きの果実を残す。

樹体の耐寒性は弱い方ではないが、冬期の落葉が問題になることが多い。風当たりの少ない場所を選び、土壤管理を徹底し、樹勢維持に留意する。

■果実特性

花は単生で、大きさはウンシュウミカンよりやや小さい。花粉は全く形成せず、単為結果性を有し、通常無核である。人工受粉によっても種子形成は極めてわずかである。胚は白色で単胚。果実の大きさは130g前後。果形はウンシュウミカンより腰高で、果形指数は110~115程度である。果皮の色は淡赤橙で濃い。果面はやや粗く、油胞はやや大きく、果頂部では突出し目立つ。果皮は薄くて果肉に密着し、ウンシュウミカンより剥皮はやや困難である。浮皮はほとんどみられない。果肉の色は濃橙色で、肉質は収穫直後はやや粗いが、予措することにより柔軟になる。じょうのう膜は薄い。糖度は12~14度と高く、果実品質は連年安定している。果実は着色が早く、11月上、中旬には完全着色となるがクエン酸の減少は比較的遅く、適食期は12月中旬以降となる。

■病虫害抵抗性

病害については、そうか病、かいよう病の罹病性はウンシュウミカン程度で、カンキョトリステザウイルスによるステムピッチングの発生はやや多いが、ウンシュウミカンに準ずる防除管理で問題はない。

■地域適応性

わが国のミカン生産の大部分を占めるウンシュウミカンは、一般的に糖度がやや低く、品質が安定しないことが欠点である。その点本品種は糖度が高く、食味良好で、連年品質が安定している。現在宮崎県でハウスの加温栽培が開始され、果実は8月に出荷し、ウンシュウミカンより高価格で販売されている。沖縄県では県の奨励品種として推奨されている。現地の粘土質土壤における栽培では、裂果が問題であったが、マルチ栽培で土壤水分の急激な変化を防ぐことにより、裂果を防ぎ、樹勢を維持している。果実は平均果重150g程度、糖度13~14度と高く、着果性は良好で収量も多い。当面は県内消費向けで、増植中である。本土にみられる落葉もなく、温度要求量が高いと思われる。本品種は、ウンシュウミカンと異なり糖度が高く、父親のクレメンティン由来の特徴のある香りがあり、外観も赤橙色で美しく、12月に収穫できる暖地向きのミカンとして栽培品種に加わってくるものと考えられる。
(松本亮司)